



ふとんシヨップ寿屋

前島 紀恵子さん

日本の文化であるふとんの魅力を多くの人に伝えたいと頑張っている街のふとん屋です。

寿屋に嫁いで44年が経ちました。実家が東京・芝大門で創業130年のふとん屋をやっておりますので、生まれてこの方、ずっとふとん屋です。

大岡山駅近く(東京・大田区)に寿屋を創業したのは義父です。若い頃、綿工場に勤めており、そのときの同僚3人とふとん屋を開業することを決めたそうです。今から70年前、3人は蒲田と大森と大岡山に店を出し、それぞれに寿屋の暖簾を掲げて商売を始めました。

昔はふとん屋といえば、打ち直しや仕立てをするのが主な仕事でした。寿屋の店の奥でも義父は自ら打ち直しをしていましたし、ほかに職人さんが2人いて、毎日忙しそうにしていたものです。

戦前は日本でも今よりずっとたくさんの綿花畑があり、ふとんは生活に欠かせないものとして業界には活気がありました。ところが今から25年ほど前を境に「ふとんよりもベッド」という時代がやってきました。日本家屋からマンションへ、和室から洋室へと住環境

が変化したのです。その頃から、ふとんは仕立てるのではなく既製品を買うという人が増え、外国製の安い既製のふとんが出回るようになりました。安ふとんは上下一組でも1万円出せばおつりが来ますが、打ち直しは一組で2万5000円ほどの代金がかかってしまいます。高くても手間のかかる打ち直しは次第に敬遠され、ふとん屋でも既製品のふとんの扱いが増えていきました。

ふとんの打ち直しは「エコ」

ふとんはいい綿を使えば、何回でも打ち直しをして一生使い続けることができます。もめん綿は干して使った汗を吸うふとんと違って一杯分の汗を吸うふとんとすから、使い続けるうちに中身の綿は固くなつていきます。でも、太陽の下で干せば自然とふんわりした柔らかさを取り戻し、温かみが出てくるのです。

そして、敷きふとんなら3年に一度、掛けふとんなら5年に一度

Store Journal 2008年6月号

44

▼長年ひいきにしてくれるお客様が多い



の魅力や打ち直しのよさを伝えようと努めています。

国産にこだわり続けて

住宅地である大岡山には以前ふとん屋が5軒ありましたが、今はうちだけになってしまいました。来店してくださるのは長年のお客様、特に50代以上の方が多いです。ふとんのお買い求めや打ち直

しは数年に一度ですが、店ではふとんカバーやシート、パジャマと

すね。

カバーやパジャマにしても同じ洗濯しても縮まないのは日本のものです。値段は安くありませんが、

古くなったから捨てようと思つて

いる」と聞き、すぐに私は「今の

ふとんで薄いふとんを2枚作つた

た。ふとん一枚は2貫目といって

8kgの重さがありますが、半分

すれば軽くなるので干すのも楽、

それを打ち直しして使い続けられ

長持ちします。その方はさっそく

手持ちのふとんで薄いふとんを2

枚作り、今では「軽くていいわ」

と喜んで使つてくださっています。

この薄いふとんはベッドパット

代わりに用なると。薄いパット

トでは冬場が寒いのですが、ふと

んなら身体がポカポカになるほど。

こうして身近な工夫でふとんを使

い続けてもらえたらとても嬉しい

ですね。

辞めるわけには

いかない

大岡山から東急線に乗って2つ

先の駅に自由が丘があります。東

京でも大きな商圏の一つですから、

その近隣の商売というのは難し

い。それでも大岡山南口商店街で

ある日、お客様から「ふとんが

ご紹介もしています。

ある日、お客様から「ふとんが

ご紹介もしています。

ある日、お客様から「ふとんが

ご紹介もしています。

ある日、お客様から「ふとんが

ご紹介もしています。

ある日、お客様から「ふとんが

ご紹介もしています。

ある日、お客様から「ふとんが

ご紹介もしています。

ある日、お客様から「ふとんが

ご紹介もしています。

ある日、お客様から「ふとんが

ご紹介もしています。

Store Journal 2008年6月号

45

▼店のこだわりは「日本製」を扱うこと



は結束して「自由が丘に対抗しよう」と頑張っています。毎月第一金曜日に行なう「金特セール」は盛り上がるのですが、ほかの日も賑わうかといえ、なかなかうまくはいきません。

今、店ではふとん関連の商品以外に印鑑やスリッパも扱っています。商店街の印鑑屋さんもスリッパ屋さんも閉店してしまったので、地域のお客様のために必要な商品を置いているのです。最近も写真の取次ぎ屋さんが閉店し、商店街は寂しくなる一方。でも、ふとん屋はうちだけですから閉めるわけにはいきません。じつはそう決意するまでに悩んだ時期もありまし

た。東京ふとん学校(東京蒲田技術学院)の校長も務めた先代の義父は「お前の代までだね。孫のときは大変だろうから店をやつてもいいから、話もできて、大好きなふとんに囲まれて、それは自分にとつて幸せなことなのではないかと気づいたのです。」

そして私は、自分が元氣な限りこのふとん屋を続けようと、心に決めることができました。

街の人たちに支えられて

主人は在宅療養をしているので、店が私が一人で切り盛りしています。お客様には高齢の方も多く、「配達してもらえないのがありがたい」という声をいただくので、67歳の私ですが、開店前、自転車に商品を積んで頑張る配達をしています。

ふとんシヨップ寿屋
東京都大田区北千束3-30-7
電話&FAX
03-3729-5532

Store Journal 2008年6月号

46